

はくさんさん

突然の訪問

第97号 H28年春号

伊豆市 法住寺 発行

Aさんが、そんな苦しみを抱えて洋明さんの所に飛び込んできたのは、何年前の早朝でした。何があつたのか慌てた様子、とにかくあがつてもらい、本堂で長い時間話していただきました。その後、洋明さんが大太鼓をたたき唱題行。お題目をひたすらにひたすらに、共にお唱えしていました。話の内容は他言無用、私どもお寺の者にも分かりませんが、困った様子だけは伺えました。

*

それから何年か経って先日、Aさんから嬉しいお便りを頂きました。その節は大変にお世話になったというお礼の言葉と、その折教えてもらった寿量の祈りのおかげで、今、元気に働いているということでした。

日々の生活の中で時に想像もしていなかった悪いことが起こってしまうことがあります。ある程度想定していれば、気構えとどうか覚悟のようなものが出来ることもありますが、急に現実の前に起こると、もうどうして良いのか本当に分からなくなってしまう。身も心もズタズタになって、立ち上がれないこともあるでしょう。もうその苦しき辛さは、当の本人でも分からない、それ程のことも起こったりするのです。

その当時は何を信じて良いのか分からない、不信だらけの気持ちが増幅させ、やり切れない思いでいた。そんな折り早朝、突然にもかかわらず、ゆっくり話を聞いても

「寿量の祈り 感謝と敬意」

大自然

ありがとうございます。

南無妙法蓮華經

社会の皆さん

ありがとうございます。

南無妙法蓮華經

ご先祖さま、家族の皆さん

ありがとうございます。

南無妙法蓮華經

祈りを口にし続けたAさん、そして怒りや失望を感謝の祈りに転化させたAさん、大したものです。

ほほえみじつ

お寺の庭に花いっぱい

昌子寺庭の山務日誌より

「微笑みをありがとう」というすてきな歌があります。「いつも笑顔でだれかのために」というすてきな言葉を年賀状に書き添えてくれた女性もいます。そして「微笑む」ことは、誰にもできるすてきなことなのだと思います。

*

らい、暫くして自分がだんだん見えるようになってきた。そして寿量の祈りを口に出せるようになったということです。1日十円貯金の数年間分も添えてくださいました。お題目をお唱えし、寿量の

ところが近頃、微笑まない人、笑顔の少ない人、表情の硬い人を見かけることがあります。そんな時は、こちらから積極的にあいさつをして、まず「微笑む」ことにしています。そういう人ほど、今笑うこと、微笑んだりすることを必要としているのではないかと、思うからです。ずっと以前のことですが、お寺にいらした奥さんに玄関で「奥さん、元氣だった？」と笑顔で話しかけると、「わあっ…」と泣きだしてしまったことがありました。「もうずっとそんな言葉を誰からもかけて

もらっていなかったから……思わず涙が出たということでした。

そしてもうひとつ「微笑む」ことは私の心の中で、たとえ相手がどういう出方をしようとして「どんな方にも笑顔で気持ち良くあいさつしよう」という自分自身の気持ちの決着なのです。

*

笑顔と云っても様々です。営業用の笑顔やつくり笑いは直ぐにわかります。残念ながらその笑顔に心癒されることはありません。でも幾多の困難を乗り越えてがんばってきた方の笑顔には、一瞬にして心癒され、また励まされたりするのです。このことはとても不思議なことです。そして私のまわりには素敵な微笑み笑顔を持つ方がいっぱいいらっしゃること、あらためてしみじみと感じています。

お墓まいり

人口減少、地域力の減少などが実感されてきて、今までの考えが通用できなくなり、どうしたら良いのかと不安になることがあります。そんな中で季節は春、お彼岸、お墓詣りです。

これからどんなに時代が変わろうとも大

自然はどっしりと存在します。ふる里の山天城山はそびえ、大見川は変わらずに流れ続けます。またお骨という目に見えるかたちのご先祖さま・魂をおまつりすることは、これからも変わらないと確信しています。

と云うのは、東京国立博物館で秦の始皇帝・兵馬俑展が開かれていましたが、巨大なものはそのような形でおまつりし、また庶民は野の石を墓標としてお骨をおまつりして魂を祀ってきました。それは人類が何千年と変わらずにやってきたことで、これからもやっけていくだろうと歴史が物語っているのです。時代と共に祭祀の仕方は変化するにしても、お骨という目に見えるご先祖さまをお祀る。それは云い替えれば自分自身を祀る、



春の墓地清掃、気持ちが良くなる彼岸です

生きている証（あかし）というということに他ならないからだと思います。

*

何年も何十年も、何百年と、自分に

繋がる方々がお墓まいりし続けてきた、一生懸命に、そして一所懸命に。今の時代は直ぐに経済的価値観でものごとを考えがちですが、そうした価値などではとても語ることも出来ない尊いものです。これからも誇りと自信を持って、お墓をきれいにしお詣りしてまいります。

薬物の怖さ

あのスーパースター、元野球選手が薬物、逮捕されました。

もう十年近く前、大仁地区保護司会主催で薬物の怖さを広報する講演を行いました。薬物依存の息子さんをもった母親のお話を思い出します。

*

大学生になって横浜でアパート暮らしを始めた息子が夏休みになっても帰ってこない。何回も連絡したが思うようにならず、不審に思った母親が直接アパートを訪ねた。ドアを開けると信じられない光景が目に入ってくる。息子はポーツと廃人のようになっていて部屋にはシンナーが充満していた。直ぐに家に連れて帰り生活を共にする中で、少しずつ良くなっていくようだが、シンナーをどうしてもやめられない。母親がちよつと買

い物に出た隙に、家の裏でシンナーしていたとか。その内に奇声を出したり、近所に大っぴらに話せず。葛藤のすえ、もう息子を殺そうと寝ている時に首をしめようとするが、寝顔を見ると幼い日々のが思い出され涙。とても殺すことは出来ない。

この母親が来場者に質問したことは鮮明に覚えている。「皆さんの友人なり親しい人が薬物を始めた。皆さんはどうするか。a 説得したり協力したりして止めさせようとする。b 本人から遠く離れる」。普通の人はaを選ぶ、しかし助けようとしている人までも薬物に引き込んでしまうことが多い。正解はb。母親ですら止めることができない、母親が息子を殺そうとまで追い詰める、地獄、それが薬物。

*

本人の意思が弱いからやめられないと思うだろうが、最近では意思というより病気とみられている。頭の芯が薬物の味を覚えてしまう、だから意思の問題というより治療しないと治らない。自分の意思で矯正施設に入るか、逮捕されて刑務所の中で矯正するか。

好奇心や一回くらいイイラア、そんな出来心が家族を壊し家や財産をなくしてしまう地獄の始まり。知人が薬物をやっていたら直

ぐに警察に連絡する、それが知人を救い出す最良の方法だそうです。

*

あのスーパースター、青年の頃は輝いていてカッコ良かった。何年か前に離婚したとのことだが、奥さんはきつと何度も止めさせようとしたと思う。しかしとても手に及ぶものではないと諦めた、そして遠く離れた、それしかなかったと想ったりするのです。

星祭り、響くお経

今年も1月末の日曜日、星祭りを行いました。その日は早朝5時からお経の音が山内に

響き渡り、何とも云えぬ気持ち善き。山内が清浄となり星祭りが始まります。ご出仕のお上の方、先ず水で身を清める水行、そしてご本尊さまはじめ、今年の運勢を司る諸天善神に來臨頂き、本年が善き年となりますよう祈願しました。そして大勢の皆さん方のご祈願成就、「善星皆來、悪星退散」を祈祈しました。

◎今年の主な年間行事予定

新年役員会で今年の主な年間行事が決まりました。計画表をお配りしますので、宜しくお願い致します。

尚、お会式は例年十月最後の日曜日としていましたが、諸事情で十月二十三日(日)と決まりました。

◎護持会役員退任

護持会役員・世話人さんの交代の時期となりました。第21期、平成25年4月から3年間、よくお勤め頂きまして誠にありがとうございました。今後とも宜しくお願い致



大寒の中、水行して身を清めます

1) 祈禱で三宝前が荘厳になりました

します。

4月からの新しい世話人さんを各地区から選出して頂きました。4月に新役員会を開き、護持会長、総代、世話人を決定し皆さまにお知らせ致します。



洋明さんのおはなし

皆さんは、一生懸命やってきましたことが叶わなかった時、その努力が認められなかった時「何でこれだけやっているのに、どうして」と思ったことはありませんか？私は、そう思ったことが今まで沢山あります。

*

先日あるご老僧と話をさせて頂く機会がありました。そのお上人は身延山の荒行を何度も修行された方で、飾らないお姿はとても親しみやすく私の尊敬するお上人です。

その方がまだ住職になって間もないある日のことです。お寺の裏山が崩れ境内に土砂が入り込んできました。幸い本堂無事だったのですが、「どうして毎日こんなにも手を合

御志納金「三月」

元村 三田五月殿 夫君七回忌御

わせ、お経も一生懸命あげているのに、何故こんな目に」と思ったそうです。そう思うだけなら皆さんも同じかもしれません。しかしそのお上人のすごいところは、鬼子母神さまにその事を物申したというところです。

「なぜ一生懸命にやっているのに私はこの様な目に合うのでしょうか？大変失礼なことを鬼子母神さまに申し上げますが、鬼子母神さまのお姿は、人間の彫った彫り物のお仏像のお姿。そのお姿を以て、どうやって私たちを救ってくれているのですか？」と申し上げたのです。

*

それから三日間何もなく、四日目の朝勤で鬼子母神さまにお経をお上げしていると急にある情景が頭の中に浮かんできました。

公園で十人の子供が遊んでいます。その様子を一人のお母さんが見ています。ある子供が砂場で目に砂が入り泣き始めます。するとそのお母さんは目を洗ってあげて、「こゝうやって遊ぶと目に砂がはいるとだよ」と教えます。次に追いかけてこをしていた子供が転んでしまい手足の皮がむけ血を流しています。ですがそのお母さんは、今度は手をかさなさいとじっと見ているのです。その眼差しは優しい慈愛の眼。「自分で立ちなさい。手

をかすのは簡単だけど、自分で立ち上がるの一步を踏み出さなさい」と言わんばかりの眼差しで一時も目をそらさず見守っているのです。

さらに今度は、もう一人の子供が公園の外に向かって走り出します。その公園の周りはダンプやトラックがビュンビュン走っている大きな道路です。そのまま走って外に出ると間違いなく事故にあうでしょう。子供があと一步で外に出てしまう時、ずっとそのお母さんはその子の手を引き留め抱き上げます。そして「この公園の中で遊んでいる分には私が見ているから大丈夫だよ。」と言います。

そのお上人はハッとしました。「そうだこのお母さんが鬼子母神さまで、この子供たちが私たちなんだ」と。今回の事は砂場で目に砂が入った事、転んでしまった事。こういう私たちの「想定外」の事さえも仏さま、鬼子母神さまにいわせれば「あなたにとつての想定外も私たちにとつては想定内。わかっているよ。大丈夫」なんだと。

*

そんな話をして下さいました。まさにそのお上人は私にとって変化の人。「仏天の見守って下さっている中では、何事も無駄はない」とは、まさにこの話のこと、有難いことです。